

複式学級の体育授業における学習指導方法の事例研究

高瀬 淳也
(鹿追町立上幌内小学校)

小出 高義
(北海道教育大学旭川校)

Case study of the learning instruction method in the physical education of the combined class

Junya TAKASE

Takayoshi KOIDE

概要

本実践報告は、複数の学年で1つの学級となる複式学級の体育授業を対象に、学年差による既習事項の違いや技能差を認めた体育授業をどのように展開していくことが望ましいのか、その可能性について授業実践から明らかにする。ここでは、複式学級の指導方法である「学年別指導」と「同単元指導」を組み合わせたネット型の授業を考案したところ、アタックの成功率およびラリー一回数の向上がみられた。そこで本実践の授業記録からその指導の過程を明らかにすることで、今後の複式学級における体育授業の一資料を提示する。

1. はじめに

平成26年度北海道学校一覧によると、北海道にある公立小学校は全部で1120校ある。そのうち、支援学級を除く複式学級が存在する5学級以下の公立小学校は346校あり、全体の約3割にあたる。このことから北海道では、複式学級をはじめとする少人数学級を対象とした研究が重要と考えられる。

複数の学年が一つの学級として編成される複式学級の授業では、一人の担任が同時に2学年の指導を行わなければならない。このため教師が一方の学年に新しい内容を指導している間、もう一方の学年は自学自習を行う方法や、2学年の教材を組み合わせた内容を同時に学習し、2年間で2学年分の内容を学習する方法など、様々な工夫が行われてきている（全国へき地教育研究連盟，1998）。

「同単元指導」の大きく2つに分けられ、同単元指導ではさらに類似内容指導と同内容指導に分類されている。

これらの指導法については、各教科の特性や学習内容、学習指導の効率性を考慮して選択されることが多い。また昨今では、複式学級から転出する児童が、該当学年の学習内容を履修していない事態が起これないように、学年別指導を主として行う教科が増えてきている。

その反面、体育では「集団で競技を行うことやお互いの活動・運動を評価し合う場面が多く、学級の仲間とともに影響を及ぼし合いながら活動することが可能な、適度な集団の大きさが要求される」（中島ら，2014）ことから、人数の確保を目的に同単元指導を行っている学校も多い。

しかし、学年差による既習事項の違いから運動技能の差が大きいこと、運動技能の習得には系統性・順次性が強く、段階を踏んで習得する必要があること、「上学年教材を下学年に指導する場合、下学年に難しく未消化になるのではないかという一般的な不安」（全国へき地教育研究連盟，1998）があることなど、同単元指導には課題も多い。

これまで、複式学級の体育授業を対象にした研究では、高瀬ら（2014）がベースボール型、高瀬・小出（2014）がネット型の報告などがあるものの、学年別指導や同単元指導などの指導法についての研究は、ほとんど見られない。

ところで、現在の小学校学習指導要領から、ボール運動系では、「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」に分けられるようになり、技能についても「ボール操作技能」と「ボールを持たないときの動き」で構成されるようになった。このことから、「学ぶべき内容としての『戦術的』側面がにわかにクローズアップされ」（岩田，2012）、特に戦術的課題の解決によってボールを持たないときの動きの習得

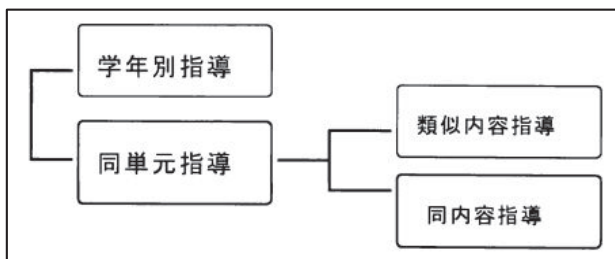


図1 主な学習指導の類型(全国へき地教育研究連盟，1998，P.21より抜粋)

現在、複式学級の指導過程は、図1のように、学級を上学年と下学年の2つに分けて異なる内容を指導する「学年別指導」と、2個学年を同じ単元（教材）によって指導す

を目指す研究も多く見られるようになった(鬼澤ら, 2007; 中村ら, 2006; 鎌田ら, 2005). その中で, 中井ら (2008) は, 戦術理解, 状況判断, 動き方など戦術的課題を技術との関係から優先的に学ばせることは, 「技能下位児に対する指導方法にも有効であると考えられている。」と述べている.

また, グリフィン (1999) も「初心者プレイヤーである場合には, まず得点すること, 得点を防ぐことに関連した基礎的な戦術的課題から始めるべきだ」と述べている. すなわち, 「何をするのか」「どのようにするのか」という戦術的な課題の解決を目指す学習は, ボール操作技能のレベルに影響されることが少なく, 学習者全員が同じ課題を立てて学習することが有効であると考えられる.

これらのことを複式学級の体育授業に当てはめると, 技能差が大きいボール操作技能は, 学年差を考慮し, 個々への指導を行いやすい学年別指導, ボールを持たないときの動きに関しては, 2学年が共通した課題をもち解決を目指していく同単元指導(本稿では同内容指導をさす)が適していると考えられる.

そこで本実践では, 複式学級の体育授業を対象とし, 学年別指導と同単元指導を組み合わせた授業を構成・実践し, その有効性について検討することとした. その中でも, バレーボールを代表とするネット型では, 児童にとって空中を移動するボールを操作することが難しく技能差が明確になりやすいこと, 一定の人数がいなければゲームが成立しないことなど, 複式学級の実践では課題が多いことから, ここで取り上げることは意義深いといえる.

2. 方法

2.1 期日・対象

2014年10月上旬から中旬にかけて, 北海道K小学校高学年複式学級(5年生男子2名, 女子1名, 6年生男子2名)にて実施したネット型授業を対象とした.

昨年度, 5年生はボールを転がしながら三段攻撃を組み立てるゲームを教材として学習した.

また6年生は, ビーチバレーボールを参考に2対2のゲームを行い, 三段攻撃で相手コートに返球すること, トスされたボールをアタックすることについても学習してきた.

2.2 教材及び単元

事前に, 5名の児童にネット型の学習で楽しみにしていることを質問したところ, 「アタックすること」と全員が答えた. そこで, ボール操作技能の緩和を図りながら, レシーブ・トス・アタックの三段攻撃によって相手コートに返球するゲーム(以降, メインゲーム)を設定した. また, 学年差による既習事項の違いや人数差を考慮し, 6年生2名対5年生3名の学年ごとにチームを編成した. ルールは, 一部, 学年による違いを作ることで, 技能差の軽減を図った.(なおルールの詳細は, 文末の資料に表2として示した)

2.3 指導法及び単元計画

本実践では, 既習事項の違いを考慮し, ボール操作に関する技能目標は, 5年生と6年生で違いを持たせた. それらの内容をまとめたものが表1の本実践で目指す技能表である.

表1 本実践で目指す技能表

レシーブ	トス	アタック
<ul style="list-style-type: none"> ・ボールに正対する. ・ボールの落下地点を予測して移動する. ・山なりのボールをセッターへパスする. ・レシーブ後, アタックの準備をする. ・レシーブする意志を声で伝える. 	<ul style="list-style-type: none"> ・ボールの落下地点を予測して移動する. ・トスする方向に体を向ける. ・3m くらいの高さをめがけてトスする. ・腕をハの字にして額からボールを送り出すようにパスする(6年生). ・トスする方向に体を向ける(5年生). 	<ul style="list-style-type: none"> ・その場でジャンプして打つ(5年生). ・二～三步助走から打つ(6年生). ・肘を伸ばして高い位置でボールを手のひらに当てる. ・ねらった方向に体を向けて打つ. ・空きスペースをねらって打つ

大まかな単元の計画では, 1～3時間目にボール操作技能の習得を目指した. 技能差や学年差があることから, 授業では準備運動後から「直接指導(教師による指導)と間接指導(自分たちで学ぶ指導)」(全国へき地教育研究連盟, 1998)を組み合わせて行う学年別指導とした.

また, 4～7時間目は, セッターの動きを中心にボールを持たないときの動きを設定し, 同単元指導で行うこととした. このようにして, 全7時間で構成した.

なお授業は, ボール操作技能の練習を含めた準備運動, 全体での課題確認, 課題解決に向けた活動(話し合い, 試しの運動, 練習など), メインゲームを基本の流れとして構成した. 授業者は, 40代男性(教員経験18年)である.

2.4 授業成果の検討

本実践では, 小林(2000)が「授業分析は『ノンフィクションの文学作品』としての授業記録をつくり」「その授業の特徴を数量的データで表し」「数量化できないものを授業記録から読み込んでいく, という作業を総合的に行う」という報告を参考に, 全時間撮影した映像から以下のように分析を行った.

- 撮影した映像から, 授業記録を作成し, 授業の様子の確認, 教師の発問や児童の回答, 練習やゲーム中の児童同士の発言, 各時間で児童が記録した学習カードから, 授業を通しての児童の変容について分析した.
- 毎時間授業のメインゲームから, アタックがコート内に入った(以降, アタック成功)数, アタックがネットにかかり自陣のコートに落ちた(以降, ネット)数, アタックがラインを越えて落ちた数(以降, アウト)数を調べ, 1時間ごとの割合を算出し, アタック技能の向上を分析した.
- 毎時間の最後に行っていたメインゲームにおいて, 1プレイでのラリーが続いた回数の平均を算出した. そ

の結果とゲームの映像から、チームでの役割行動、連携プレイの1時間ごとの変容について分析を行った。なお、1プレイとは、サーブしてから得点が決まるまでの過程のこととした。

3. 結果

3.1 授業の展開と児童の様子

3.1.1 1～2時間目

3.1.1.1 アタック練習

縄跳びを使ったウォームアップ後、アタックの打ち方について全員に指導をした。アタックは、両手でボールを持ち、自分の腰当たりの高さから両手で直上に投げあげたボールを打つように説明した。その後、6年生は間接指導、5年生には直接指導の時間とした。

6年生は昨年度も同様の学習をしていることから、二人で向かい合った状態でアタックを打つことと、お互いに気が付いたことがあれば助言し合うことの2点を伝え、練習を行わせた。

5年生は、初めて学習することから、1人1個のボールを持ち、壁に向かってボールを打ち込む練習を行わせた。5年生は3名とも、腕を強く振り下ろす動きから、肘が曲がった状態でアタックしていたため「肘を伸ばして、バチン」と、声に出しながら打つ練習を行わせた。その後、6年生は直接指導、5年生は間接指導の時間とした。

さらに、5年生にはお互いに3～4mほどの間隔になるようにして三角形を作り、3人で1個のボールを使って時計回りでアタックを打つ練習を行うように指示した。加えて、お互いのアタックを打つ様子を見て助言し合うように伝えた。

3.1.1.2 トス練習

6年生には、トスの指導を行った。中学校で学習するオーバーハンドパスにつながるよう、額に引き寄せるようにしてボールを両手でキャッチし、そのまま山なりの軌跡を描くようにボールを投げる指導をした。6年生の1名は、額でボールをキャッチしたときに、肘が閉じていたことから、両腕でハの字をつくってキャッチするよう指導した。もう1名は、「衝撃技術(待ち受け動作からのボールの呼び込み動作)」(進藤, 2007)がある程度できていたことから、可能な限りボールを止めないでトスできることを意識するように指導した。その後、6年生のトス技能がおおよそ定着したことを確認し、再び6年生は間接指導、5年生には直接指導の時間とした。

6年生には、アタック練習と同じように、向かい合ってトスの練習をすること、お互いの動きを見て助言し合うことを指示した。5年生には、アタック練習を終了させ、トス練習を行わせた。5年生は、安定したトスができることを目指して、両手で腰の高さあたりからボールを投げ上げてトスするよう指導した。

ネットを使って図2のような二人一組とし、実際にトスを上げる練習を行った。(この写真は該当者の承諾を得ている) 5年生はトスの高さや方向が安定しなかったことから、両手で持ったボールを腰の高さで一度止め、膝を使った上下運動も利用してトスを上げるように指導した。また、ネット上に張ったゴム紐を高さの目安とするようにも伝えた。



図2 トスの練習している様子

このようなトス練習によって、6年生1名は、オーバーバンドパスに近い状態になり、もう1名も腕をハの字にして額でボールをキャッチできるようになった。5年生は、高さが安定してきたが、トスしたボールが相手コートに入るなど方向にはまだ不安定さが見られた。

3.1.1.3 ネット越しのアタック練習

この後、ネットを使ってのアタック練習を行った。6年生は、2歩助走を入れてアタックを打つ、5年生は助走なしでジャンプして打つように指示した。その後、6年生は間接指導、5年生には直接指導の時間とした。

5年生は、打ち下ろすことへの意識が強く、アタックしたボールがネットを越さないことが多く見られたことから、「肘を伸ばして、高いところで、バチン」と言いながら打つよう指導した。また、練習を止めて、6年生が肘を伸ばして高い位置でボールを打っている様子を観察させた。この後、6年生への直接指導の時間を予定していたものの、ボール操作技能の予定していた時間は終了した。

3.1.1.4 メインゲーム

1時間目と2時間目は続きの時間で行ったため、5分程度の休憩のあと、実際にメインゲームを行った。ルールは、メインゲームをしながら、随時説明を加えることとした。レシーブには、ワンバウンドとキャッチを認めていたことから、三段攻撃の形にはなっていたが、アタックがアウトになったり、ネットを越えなかったりして、ラリーがあまり続くゲームとはならなかった。

3.1.2 3時間目

3.1.2.1 ボール操作の練習

縄跳びを使ったウォームアップ後、キャッチボール、向

かい合っのアタック練習、トス練習、ネットを使っの
アタック練習を行っ。この練習時間は、5年生、6年生
の順で直接指導を行っ。間接指導となる学年は、いつも
のように練習をしながらお互いに気が付いたことや助言を
伝え合うように指示した。

5年生のアタック練習では、前時に続き、腕を強く振り
下ろそうとして肘が曲がることが見られていたことから、
繰り返し指導した。また、6年生には、2歩助走のリズム
をつかませるよう、手本を見せるとともに、助言を繰り返
した。

次に、全員を集めて、セッターになった場合、レシーバー
の方を向いてボールをキャッチ(受ける)、トスする方向を
むく(向く)、トスを上げる(トス)という一連の動きを説
明した。

この後、6年生は直接指導、5年生には間接指導の時間
とした。5年生には、お互いに3～4m離れ三角形を作り、
時計回りで体の向きに気をつけてトス練習するように指示
した。6年生には、受ける・向く・トスを一連の動きで
できるように指導・助言を行っ。その後、6年生は間接指
導、5年生には直接指導の時間とした。5年生は、トスの
方向に不安定さが見られたことから、「受ける、向く、トス」
という言葉に合わせて確実にできるようにし、ネットと平
行にトスできるよう方向も意識させた。

3.1.2.2 メインゲーム

授業が30分過ぎた当たりで、メインゲームを行っ。ゲー
ムの仕方やルールは前時で理解できていたため、授業者が
改めてゲームに関する説明をする必要はなかった。ゲーム
では、確実に相手コートに返球しようとする意識が強く、
アタックは山なりの軌跡を描くものが多く見られた。しか
し、レシーブのキャッチミスも見られ、ラリーがあまり続
くことはなかった。

3.1.3 4時間目

準備運動後、3時間目まで行っキャッチボール、二人
一組のアタック練習、ネットを利用してのアタック練習を
行っ。

その後、4時間目より2学年で一緒の学習を進めていく
ことを伝えた。事前の聞き取り調査から、アタックに興味・
関心をもっていたことを把握していたため、同単元指導の
授業の流れを理解させることもねらい、アタック技能向上
の学習を目指した。

そこで「どこをねらうとよいか」と発問をし、児童に回
答させた。6年生はアタックの技能がある程度身に付いて
おり「端の方をねらう。その方がキャッチされにくい」と
の回答であった。5年生は、6年生の回答を聞き、「端の方
をねらう」と「真ん中をねらう。確実にアタックを入れな
いと点数につながらない」という回答があった。

その後、実際にコートに立っアタック練習をした。5
人とも、クロス方向にアタックするときも、体の向きがネッ

トに正対していたことから、「ネットを打つとき、おへそは
どこを向けるといいと思う?」と発問した。「打ちたい方向」
と児童は答えたが、お互いの動きを見合ると、ネットに常
に体が正対していることに気が付き、「助走の方向を変える
といい」「ななめ(ねらう方向)をむいてからジャンプする」
などの意見が出た。

さらに、順番にアタックの様子を観察させ、助言し合い
ながら練習する時間を設けた。メインゲームでは、徐々に
アタックの成功率が高まり、ラリーが続くようになってき
た。

3.1.4 5時間目

5～6時間目は、セッターの動きについて学習を行っ。
5時間目では、4時間目のゲーム中、二人の間に返球され
たボールを捕ろうとして体をぶつけたプレイを取り上げた。
まず、児童に前時でのゲームを振り返らせ、「(レシーブす
る)2人の間にボールが来たら、どっちがレシーブすると
よい?」と発問した。「左側の人が捕る」「先に、レシーブ
する人を決めておく」「順番で捕る」など事前に役割を決
めておくという回答があった。

その後、実際にコートに立っ、授業者が2人の間にボ
ールを投げ入れ、試してみた。児童からは、「なんかやりに
くい」「(レシーブする)順番を決めてやっていたけれど、
順番が上手くいかないことがある」などの意見が出てきた。
一度集合して、授業の初めと同じ発問をした。児童からは
「真ん中はどっちが捕ると役割を決めておいた方がいい。」
「役割もあるけれども、(ボールを)捕りに行くときに『や
るよ』って声をかけるといい」という回答があった。この
ことを受け、役割とともに意思表示の声かけを行うとよい
ことを確認し、練習を行っ。練習では、あまりに声をか
け合う姿が見られなかったため、声を出すことでボールを
捕る意思表示がなされ、役割が明確になることを理解させ
るため繰り返し指導したところ、徐々に声が出てくるよう
になった。

この後に行っゲームでは、「俺、(ボール取りに)行く」
など意思表示する声が多く聞かれるようになった。

3.1.5 6時間目

前時の学習に引き続き、どちらがレシーブするかの役割
行動をさらに素早く判断することを目指した。5時間目の
学習を振り返り、「トスする人は、いつ動き出すか」と発問
をすると、『「捕るよ」と聞いたら動く』と回答があった。
前時までのゲームでは、意思表示ができるようになったも
ののレシーブする児童が声を出すことが多く見られた。

そこで、「レシーブする人は、声を出してボールをレシー
ブしている。じゃ、セッターになる人は、何をするかな」
と発問した。児童から「動くだけ。セッターの人が、『レシー
ブ頼む』って言ってもいいんじゃないかな」という回答が
あった。

その動きを実際にコートで試すと、はじめは「できない」

「忘れてしまう」などと思うようにいかない様子が見られたが、声かけとともにセッター役の児童が、徐々に素早く移動できるようになった。

授業の終わりに行ったゲームでは、8回のラリーが続くこともあり、一度も勝てなかった5年生が得点をリードする場面も見られた。

3.1.6

準備運動後、各チームで練習時間を設けた。最後のゲームに向けて、どんな練習をしたいかを考えさせたところ、両チームともアタック練習を行うことになった。5年生チームは、これまでアタックがアウトになることが多かったため、5時間目に助言したクロス方向にアタックする練習を行った。6年生チームは、より強いアタックが打てることを目指して練習を行っていた。

その後、練習ゲーム、作戦タイム、メインゲームの流れで進めたが、この時間で初めて5年生チームが6年生チームに勝利することができた。

3.2 アタックの様相

アタックにこだわりを持ち学習を進めてきた児童たちであったが、そのアタックの内容はどのように変化したのかについて見てみたい。図3は各授業時間内に出現したアタックが、成功したとき、アウトしたとき、ネットにかかったときの割合を示したものである。

授業が進むにつれて、ネットにかかって自陣に落ちるアタックの減少が見られた。アタックがアウトになる割合は4時間目以降、20%前後と大きな変化はしていなかったことから、ネットにかかってしまうケースが減少した分、アタック成功の割合が高まってきたといえる。

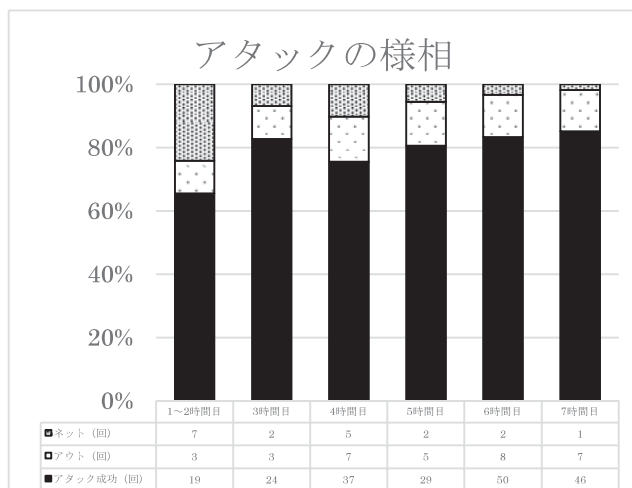


図3 アタックの様相

3.3 ラリーの回数

次に、ゲーム中のラリー回数がどのように変化したかを見てみたい。図4は各授業時間内でのラリー回数の平均を

まとめたものである。

ここでは、ラリー回数も授業が進むにつれて増加の傾向が見られた。特に、6~7時間目では、短いラリーもあったが、4~5回のラリーが続く場面が多く見られ、これらの結果に結びついている。

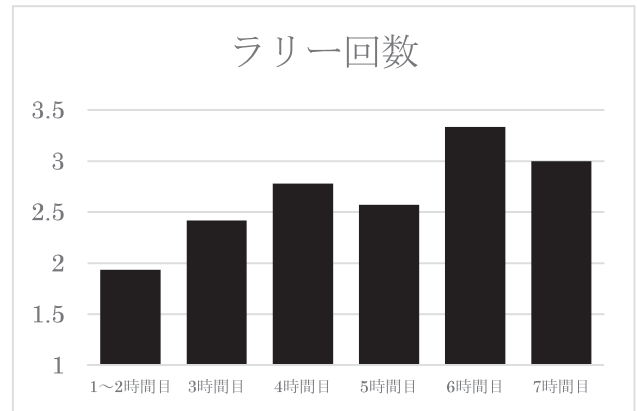


図4 ラリー回数

4. 考察

4.1 学年別指導

学年別指導では、授業者が一方の学年を指導している間に、もう一方の学年は自学自習、もしくは児童だけで学習を進めていかなければならない。このことから本実践では、既習事項の違いを活用した授業を目指した。

1時間目には、6年生に前年度学習したことを思い出しながらアタック練習をさせ、その間に5年生へのアタックの動きについて初歩の段階から指導した。その後、5年生がアタックの技能練習をしている間に6年生にトス技能の指導、というように直接指導・間接指導を組み合わせながら、技能の指導を行った。

4.1.1 学年別指導の成果

間接指導では、授業者からの指導をもとに、児童が学習を進めていくが、対象学級では他の教科でも学年別指導を行っているため、児童は混乱することなく取り組んでいた。その中で本実践では、間接指導の時間が単なる繰り返し練習とならないように、お互いの動きを見て助言するように指示した。このことによって、「もっと右」「今のいいよ。」など、児童同士で教え合いながら練習することができた。

一方で直接指導では、5年生はアタックする際、下に強く打ち付けようとする動きが見られていたことを受け、5年生3名に共通する技能指導と、個々に適した助言を行うことができた。

6年生は、トスの際、腕をハの字にして構えることや、アタックする児童の位置に合わせて、体の向きを変えながらトスするなどの技術を、個々に合わせて指導ができていた。

このように学年別指導を取り入れることによって、間接指導では児童が主体となって助言し合いながら技能練習ができ、直接指導では授業者が個々の技能実態や学年の発達段階に応じた指導をすることができた。また、授業の後半では直接指導の時間でも、児童同士で助言する姿も見られるようになり、技能の向上につながったといえる。

さらに、図3のグラフからも分かるようにアタック技能では、ネットにかかることが減り、コート内に返球する確率が高まっていった。また、授業の初めでは、山なりの軌跡を描くアタックが多かったが、後半はコート内に向かって直線的なアタックが増えた。

これらのことから、本実践ではボール操作技能の習得に学年別指導（個別指導を含む）が有効に機能したと考えられる。

4.1.2 学年別指導の課題

学年別指導は細かな指導ができる分、時間がかかり、本実践でも1時間目において6年生に予定していた直接指導ができなかった。

また、「直接指導（教師による指導）と間接指導（自分たちで学ぶ指導）の組み合わせや教師の『わたり』（他の学年の指導に移る）が複雑になる」、2学年分の「資料や教材の準備に時間がかかり、教師の負担が増大する」（全国へき地教育研究連盟、1998）という指摘があるように、指導内容を2学年分準備すること、各学年の様子を見ながら、他学年の指導に移る「わたり」のタイミングの難しさなどの課題も見られた。

なお複式学級の授業では、担任1名で両学年の指導を行うことがほとんどであり、児童のけがが起りやすい体育では、細心の注意を必要とする。本実践では、5年生3名、6年生2名と少人数であったことから、バドミントンコートの手前部分をを使って各学年の指導ができ、授業者の目が届く範囲内で活動ができた。学年別指導で異なる活動を指導する場合は、一方の学年の指導に集中するがあまり、他方の学年の安全面に配慮が行き届かないことも、今後の実践において考慮すべき点である。

4.2 同内容指導

4時間目は、両学年に共通するアタック技能について、5～6時間目は、セッターの動きについて取り上げた。いずれの時間も、学級5名に同じ発問を行い、課題の解決方法を話し合わせた。

4.2.1 同内容指導の成果

5～6時間目では、どちらがレシーブするか意思表示と、それに合わせてセッターとなった児童が素早くネット近くへ移動することを、学年共通の学習として取り組んだ。授業では、学年別指導に比べ、意見の数が増え、6時間目では「セッターの人が、『レシーブ頼む』って言ってもいいんじゃないかな」というように、ゲーム中の役割を明確に

する具体的な方法にも気付きが見られた。

また、話し合いで6年生が積極的に発言したり5年生に助言したりすることが多く、5年生は教わったことを練習に生かすなど、複式学級のよさが同内容単元になってから多く見られるようになった。学習カードからは「セッターの時、すぐ移動できるように仲間から合図をもらったらすぐ動く」（5年生）、「最初は声かけが少なかったが、意識することで、どっちが捕るか迷いがなくなった」（6年生）など、4～6時間目の記入内容に学年差は見られず、同学年指導の課題について、本実践ではほとんど影響がなかった。

さらに、図4のグラフに注目すると、授業が進むにつれてラリーの回数が増えてきた。これは、アタック技能の向上とともに、同内容指導で学習したセッターの動きが身に付き、安定したトスが上がるようになったことも要因として考えられる。実際、メインゲームでは、セッターになった児童が素早くネット際に移動できており、レシーブされたボールを受ける準備時間の確保によって、トスの方向や高さの安定につながったと考えられる。

これらのことから、本実践では5人で話し合うことで思考の広がりが見られ、課題の解決方法を考えたり、練習方法を工夫したりすることができ、4～6時間目の学習は有効だったと考えられる。

4.2.2 同内容指導の課題

同内容指導は、上の学年にとっては前年度と同じ学習になり、逆に下の学年にとっては学習内容の系統性がない中で学ばざるを得ないなどの課題が考えられる。

本実践では、セッターの動きについては前年度、両学年とも学習していないことを把握した上で、学習内容の決め出しや単元を計画している。このことから、児童の既習事項の把握は、単式学級以上に重要と考えられる。

5.まとめ

本実践では、小学校高学年における5名の複式学級のネット型授業において、ボール操作技能は学年別指導、セッターの動きを中心にボールを持たないときの動きの学習は同内容指導を取り入れた授業の有効性について検討をした。

その結果、本実践では学習内容によって指導方法を変えて、技能の向上が見られ、その有効性が示唆された。

今後、学年別指導と同内容指導の課題を解決すべく実践を積み重ねる中で、小規模校における複式学級の体育授業に有益な資料を提供していきたい。

引用・参考文献

- 浅井正仁 (2015) バレーボール. 高橋健夫ほか編, ステップアップ中学体育. 大修館書店: 東京, pp.171-190
- 北海道教育委員会 (2014) 平成26年度北海道学校一覧について, 3小学校の部. <http://www.dokyoj.pref.hokkaido.lg.jp/file.jsp?id=789759>, (参照日2015年5月30日).
- 岩田靖 (2012) 体育教材を創る. 大修館書店: 東京.
- 鎌田望・斉藤和久・岩田靖・北村久美 (2005) 小学校体育におけるネット型ゲームの教材づくりに関する検討―「連携プレイ」の実現可能性からみたアタック・プレルボールの分析―教育実践研究:信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 6:111-120.
- 小林篤 (2000) 体育授業づくりと授業研究. 大修館書店: 東京, pp.242-253.
- リンダ・グリフィン, ステファン・ミッチェル, ジュディ・オスリン: 高橋健夫他訳 (1999) ボール運動の指導プログラム. 大修館書店: 東京, pp. 2-16.
- 文部科学省 (2008a) 学校規模によるメリット・デメリット (例).
- 文部科学省 (2008b) 小学校学習指導要領. 東京書籍: 東京, pp.92-99.
- 文部科学省 (2008c) 小学校学習指導要領解説体育編. 東洋館出版: 東京, pp.13-21.
- 中村恭之・岩田靖・吉田直晃 (2006) 中学校体育におけるネット型ゲームの授業研究―「連携プレイ」の役割行動を誇張するアタック・プレルボールの検討―教育実践研究:信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 7: 1-10.
- 中島寿宏・秋野禎見・高瀬淳也 (2014) へき地小規模小学校におけるICT利用による児童の協働性を引き出す体育授業―クラウドコンピューティングを用いた2小学校間での交流実践―. 運動とスポーツの科学, 20(1): 113-120.
- 鬼澤陽子・小松崎敏・岡出美則・高橋健夫・齋藤勝史・篠田淳志 (2007) 小学校高学年のアウトナンバーゲームを取り入れたバスケットボール授業における状況判断力の向上. 体育学研究, 52(3): 289-302.
- 織奥信男 (1993) 小学校の小規模校における体育授業に関する研究―極小規模校の教科体育経営について―. 体育・スポーツ経営学研究, 10(1): 57-72.
- 進藤省次郎 (2007) バレーボールのパスの教材構成と教授プログラム. 北海道大学大学院教育学研究科紀要, 101:227-244.
- 高瀬淳也. (2015) 複式学級における「協同的プレイ」をめざしたベースボール型の実践. 体育科教育, 63(2):26-30.
- 高瀬淳也・小出高義 (2014) へき地小規模校の体育授業におけるネット型の事例研究. 北海道教育大学学校・地域教育研究支援センターへき地教育研究支援部門へき地教育研究, 69:25-30.
- 高瀬淳也・森田憲輝・中島寿宏 (2014) へき地小規模小学校におけるベースボール型授業の事例研究. 北海道体育学会, 49:13-19.
- 高瀬淳也・中島寿宏 (2014) へき地小規模小学校におけるICTを活用した体育授業の実践-交流の広がりを目指した授業事例から. 教育学研究, 25:231-238.
- 全国へき地教育研究連盟 (1999) 効率的な学習指導と学校・学級経営～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例～: 東京.
- 全国へき地教育研究連盟 (1998) 学習指導方法の工夫・改善～へき地・小規模・複式学級を有する学校の実践的事例～: 東京.

資料

表2 メインゲームのルール

■チーム

6年生2名 対 5年生3名

■コート

縦4.5m×横6.1m

バドミントンコート（ダブルス）のラインを利用して作成した。

■ネット

バドミントン用ネット

高さは、バドミントンの支柱にさらに部品をつなげ1.8mにした。

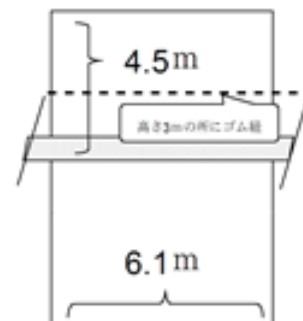
ネット上、床から3mの所にゴム紐を張り、トスを上げる高さの目安をつくった。

■ボール

株式会社 ミカサ社製 バレーボール4号 レジャー用 (MVA460)

■ルール

- ・ボールを必ず3回のボール操作を行い、相手コートに返す
- ・同じ人が2回続けてボール操作できない
- ・ブロックは禁止



	6年生	5年生
レシーブ	<ul style="list-style-type: none"> ・1バウンドまで許可 ・ボールをキャッチしてもよいが両手で行う 	<ul style="list-style-type: none"> ・1バウンドまで許可 ・ボールをキャッチしてもよいが両手で行う ・レシーブのみ2名で行う。残り1名はコート外にいる
トス	<ul style="list-style-type: none"> ・ノーバウンドでボールを操作 ・ボールをキャッチしてもよいが両手で行う。 (ボールを額付近でキャッチ、そのままトスするように指導するが、得点には関係ない) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ノーバウンドでボールを操作 ・ボールをキャッチしてもよいが両手で行う。
アタック	<ul style="list-style-type: none"> ・片手でボールを操作 	<ul style="list-style-type: none"> ・片手でボールを操作 ・トスしなかった2名がアタックを打てる
ポジション	<ul style="list-style-type: none"> ・1プレーごとに左右入れ替わる 	<ul style="list-style-type: none"> ・1プレイごとに3人でローテーションする
サーブ	<ul style="list-style-type: none"> ・両手で下から相手コートに投げ入れる。相手がレシーブを失敗すると、相手チームの得点となる。 	
得点	サーブまたは返球失敗で1点 1セット10点先取 ラリーポイント	

※サーブから得点が決まるまでを1プレイとする。